筑紫女学園大学リポジト

『エノク書』がネルヴァルに与えた影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 間瀬, 玲子, MASE, Reiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/157

『エノク書』がネルヴァルに与えた影響

間　瀬　玲　子

L'influence du Livre d'Hénoch sur Nerval

Reiko MASE

Ⅰ. 序文

19世紀フランスの作家ジェラール・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval はその著作の中で聖書偽典『エノク書』について記載している。また聖書の人物名や町の名前としてのエノクにも言及している。その際参考にした書籍をいくつか列挙している。ネルヴァルが列挙した書籍の中には今まで容易に参照できないものが多かった。原典を入手することにより，ネルヴァルがどのような形で『エノク書』から影響を受けたのかを実証するのが本論文の目的である。

Ⅱ.『エノク書』とは何か？

旧約聖書において偽典とは正典にも外典にも入らなかった重要な文書という位置づけをされている。『エノク書』は旧約聖書偽典のひとつである。

本論文の目的は『エノク書』の歴史を記述することではなく，ネルヴァルが『エノク書』からどのような影響を受けたかを検証することにある。よって最も根本的な定義を記載することに留めたいと考える。

まず聖書偽典『エノク書』とは何かを検証することから始めたい。1980年代に発行された *Grand Dictionnaire encyclopédique Larousse*『ラルース大百科事典』のエノク書の項目は非常に簡潔に記載されている。その一部を引用してみよう。

> Hénoch (livre d'), une des grandes apocalypses juives. Il forme un ensemble d'exhortations et de prophéties concernant la fin des temps.(1)

> エノク（エノク書），ユダヤの重要な黙示録のひとつ。それは時の終わりに関する説教と予言の総体を形作っている。

この記述と比較すると *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*『19世紀ラルース大百科事典』に

おける ÉNOCH ou HÉNOCH の項目は詳細に記載されている。[2] 19世紀に発行されたこの百科事典に書かれている事項で非常に重要な意味を持つ箇所があるので，後に引用を行う。

Ⅲ. ネルヴァルが『エノク書』について記載した箇所（1）

ネルヴァルが作品の中でエノク（人名または都市名）について言及した箇所は少なくないが，『エノク書』そのものについて記述している箇所はそれほど多くない。その中で重要なのは以下の２ヵ所である。

まずネルヴァルが1844年にディオラマ（19世紀前半に流行した視覚芸術のひとつ）について論じた文章において『エノク書』について記述している。その中で重要な箇所を見てみよう。

> Parmi les livres apocryphes de la Bible, il en est un intitulé le Livre d'Énoch, qui nous a valu *Le Paradis perdu* de Milton et *La Chute d'un ange* de Lamartine. Ce n'est autre chose que l'histoire détaillée de la lutte des esprits rebelles contre le Tout-Puissant aidé de ses légions saintes. Le père Kircher en rapporte un très long fragment traduit en grec et en latin.[3]

> 聖書の外典の中でエノク書と題された書物がある。それは私たちにミルトンの『失楽園』とラマルチーヌの『天使の失墜』をもたらした。これは天使の大群に補佐された全能の神に対して反逆する天使の戦いの詳細な話に他ならない。キルヒャー神父はギリシャ語とラテン語に翻訳されたとても長い断章を引用している。

この引用に記載されているキルヒャーはネルヴァル研究においては非常に有名な人物である。上記に引用した『19世紀ラルース百科事典』の Kircher（Athanase）の項目を引用してみよう。

> Kircher（Athanase), célèbre jésuite allemand, physicien, mathématicien, orientaliste, philologue, né Geyssen, près de Fulde, en 1602, mort à Rome en 1680.[4]

> アタナシウス・キルヒャー，有名なドイツのイエズス会士，物理学者，東洋学者，文献学者，1602年にフルダの近くのガイサに生まれ，1680年にローマで亡くなった。

ネルヴァルは上記の引用文の中でキルヒャー神父の断章について言及している。これはプレイヤッド版の注によるとキルヒャーの『エジプトのオイディプス』ローマ，1653年の２巻目 *Œdipus Ægyptiacus* , Rome 1653, tome Ⅱのことである。[5] 今まではこのような著作を読むことは容易ではなかった。しかし現在ではフランス国立図書館の電子テキスト Gallica 及び Gallica ２からダウンロードすることができるようになった。[6] 合計３つのファイルから成っている。

ネルヴァルが言及したとおりキルヒャーは『エノク書』の一部を掲載している。具体的には左側にギリシャ語訳，右側にラテン語訳が記載されている。この箇所が『エノク書』のどの個所であるかを調べるためにまず日本語の概説書と日本語訳を調べてみた。(7)『エノク書』には『エチオアピアエノク書』と『スラブエノク書』と言われるものがあるが，キルヒャーの記述と近似性があるのは『エチオピアエノク書』のほうである。次に『エノク書』の日本語訳に記されている外国の文献を調査した。(8) 英語版の『エノク書』やフランス語版の『エノク書』とキルヒャーの該当箇所を比較しても肝心の天使名や数字が合致しない。

ネット上で『エノクの黙示録』日本語訳を入手し，キルヒャーの該当箇所と比較すると驚くほどの一致を見た。この日本語訳の原書のひとつが1970年にオランダのライデンで発行された本であった。編者はブラック氏　Black である。フランス国立図書館から複写を入手し，確認作業を行った。その結果わかったのは以下のことである。キルヒャーが引用しているのは『エノク書』の６章から10章までである。多少記載されている数字に違いはあるが，天使名はほとんど同じである。(9) このブラック版出版の経緯は『エチオピアエノク書』を日本語訳した村岡氏によると以下のとおりである。

> クムラン断片出土以前は，本書（『エチオピアエノク書』）はエチオピア語訳においてのみその全体が伝えられていた。(中略）前世紀末（19世紀）にエジプトのアクミムでギリシャ語訳の断片が発見され，(中略)，M・ブラックによって1970年にまとめて出版された。(10)

すでに述べたようにキルヒャーは17世紀の人である。20世紀のクムラン断片出土よりもずっと前に活躍した人であり，この説明では何の解決にもならない。なおここで書かれているクムラン断片とは1947年にクムラン（イスラエル）の洞窟で発見された文書類のことである。

キルヒャーは『エジプトのオイディプス』の２巻68ページで『エノク書』についてラテン語で記述を行っている。そこに言及されている本や年号を手元にある英語版やフランス語版の『エノク書』の解説と照らし合わせても決め手となるような記述は見当たらない。どうしてキルヒャーの『エジプトのオイディプス』に記載されているエノク書断片とブラック版のエノク書がほぼ同じであるのかは今後の課題である。また多少違うという点も考察しなければならない。

ネルヴァルがどこまでギリシャ語とラテン語を理解したのかはわからない。ネルヴァルが書いた文学世界における記述とキルヒャーが掲載した『エノク書』の共通点は山の頂，大洪水，鉱石，金属，地上に流れる夥しい血，底なしの深淵，終末，火の混沌であろう。これはネルヴァル文学世界のキーワードと言ってもよい項目ばかりである。特にネルヴァルの最後の作品『オーレリア』のテーマとの類似性は重要な点である。なおキルヒャーが掲載した『エノク書』で記述されている巨人伝説はネルヴァル文学世界において重要テーマとは言えない。

Ⅳ. ネルヴァルが『エノク書』を記載した箇所（2）

さて次にネルヴァルが『エノク書』を言及したのは『赤い悪魔』*Le Diable rouge* という作品においてである。『エノク書』という観点から最も重要な作品といえる。1849年にネルヴァルはアンリ・ドラージュ Henri Delaage と協力して『1850年用カバラ年鑑』*Almanach cabalistique* を編集した。『赤い悪魔』はこの中に収録された作品である。プレイヤッド版では残念ながら図版が収録されていないので，フランス国立図書館に複写を依頼し，入手した。

> Ce livre a toujours été repoussé des Bibles orthodoxes — parce que l'on avait craint qu'il ne se trouvât dans la rébellion de Satan une certaine grandeur qui séduirait les imaginations humaines. Un seul savant catholique, le père Kircher, jésuite, en a traduit un fragment dans son *Œdipus Ægyptiacus*.(11)

> この本（『エノク書』）はいつも正統な聖書から締め出されてきた。── というのはサタンの反乱の中に人間の想像力を魅惑するようなある種の偉大さがあると恐れたからである。ただひとりカトリックの学者，イエズス会のキルヒャー神父が彼の『エジプトのオイディプス』においてその断片を翻訳した。

この記述にネルヴァルは次のような注をつけている。

> Le livre d'Énoch a été traduit tout entier du syriaque en latin par l'évêque de Canterbury（1821）.(12)

> 『エノク書』はカンタベリーの司教によって古典シリア語をラテン語に全訳された。

日本語訳の注には「ネルヴァルのこの記述は不正確で（中略）アイルランドのカセルの司教リチャード・ローレンスによってエチオピアの草稿から最初に翻訳された（1838）」と記されている。(13) この注は『19世紀ラルース百科事典』をもとにして記載されている。(14) また『エノク書』の研究者ピエール・ジョヴァノヴィック氏 Pierre Jovanovic は2002年に刊行した著作に次のように記載している。

> Mais lorsqu'en 1821, le linguiste Richard Laurence, professeur à Oxford, finit par traduire ce revenant de l'éthiopien en anglais, il lui a insufflé, sans le savoir, une nouvelle vie.(15)

> しかし1821年にオックスフォード大学教授リチャード・ローレンスがエチオピア版の亡霊を英語に翻訳することを終えた時に，それと知らずに新しい命をそれに吹き込んだ。

年号の記載に差異はあるが，ネルヴァルの記載が不正確であることは間違いなさそうである。ここ

で指摘できることはネルヴァルが『エノク書』の歴史について正確な知識を持ってはいなかったということである。ネルヴァルの知識はキルヒャーの『エジプトのオイディプス』のみであった可能性すらあると言わざるを得ない。

さて次にネルヴァルは『赤い悪魔』において赤い悪魔を次のように説明している。

> ... Il（le Diable rouge）présidait, lorsqu'il entra dans la conjuration de Satan, à l'étoile du soir vulgairement nommée Lucifer.[16]

> 彼（赤い悪魔）はサタンの陰謀に加わった時は，俗にルシファーといわれる宵の明星を司っていた。

そしてこの記述にネルヴァルがつけた注が以下のとおりである。

> Lucifer veut dire《porte-lumière》; voilà pourquoi sans doute ce diable est représenté, comme on le voit plus haut, éclairant les sept planètes avec sept flambeaux.[17]

> ルシファーは「光を持つ者」を意味する。それ故恐らくこの悪魔は上に示したごとく七つの光で七つの惑星を照らしていた。

flambeau という単語は松明を意味する単語である。しかしキルヒャーの挿絵に描かれた flambeau はどちらかというと７本の蠟燭が置かれた蠟燭台に近い。ここは仮に「光」と訳すことにする。見方によってはある種の楽器にも見える。そしてネルヴァルが「上に示した」と記述していても，プレイヤッド版には図版が掲載されていない。今まではプレイヤッド版の注に従い，ネルヴァルの研究者であったジャン・リシェ　Jean Richer 氏の著作に頼るしかなかった。[18] この著作では『赤い悪魔』に掲載されたパストロの絵とキルヒャーの『エジプトのオイディプス』に収録された図版を並置している。リッシェの著作はかなり小型本であり，図版の詳細がよくわからない。

今回キルヒャーの電子テキストとネルヴァルの『赤い悪魔』の複写を入手することができたので，二つの図版を検証してみることにする。

キルヒャーの『エジプトのオイディプス』に掲載された図版を見てみると，全く同じ図版が２巻の204ページと428ページに掲載されている。キルヒャーはパンの神の説明をＡからＯまでに分類して行っている。この図版の説明（原文はラテン語）をジョスリン・ゴドウィン Joscelyn Godwin が英訳してくれている。また日本語訳もあるので，それらを参考にしながら訳してみよう。[19]

Ａ　赤ら顔。世界における温熱の力。
Ｂ　月下の自然への天体の光線の力。

C　男性的要素。
D　１年の周期的循環，およびその回転全体の力。
E　すべてのものを支える力強さ。
F　支柱，すなわち恒星天の力。
G　植物，種子，樹木の密集する大地（女性的要素)。
H　（女性的要素の）湧水，灌漑によって大地を肥沃にする。
I　畑，収穫，そして野菜のさまざまな生命形態。
K　７つの惑星の和声。
L　山岳，荒々しく起伏のある場所。
M　繁殖力。
N　堅固な基盤。
O　風の力と，かきたてられた時のその速さ。
(Ｊの項目はない)

この神の左手の周囲には同心円が幾重にも描かれているが，それをキルヒャーは「七つの惑星の和声」と説明している。キルヒャー自身は挿絵の説明に「光」とは明記していない。

ネルヴァルはこの図版に関して次のような説明をしている。

L'image qu'en donne le père Kircher, — et que nous avons reproduite en tête de cet article — semblerait plutôt représenter le grand Pan, c'est-à-dire l'esprit de la terre auquel le *panthéisme* moderne rapporte ses adorations et ses hommages.[20]

キルハー神父によって与えられた図像 ── 私たちはこの記事の冒頭にそれを複製したのだが ── 近代のパンテイスム（汎神論）が崇拝と讃辞を寄せる偉大なるパンの神，つまり大地の精をむしろ表しているように思えた。

キルヒャーの『エジプトのオイディプス』に掲載された図版がパンの神を表していることをネルヴァルが認知していたことを証明する一文である。しかもルシファーを表す図版を描くために，パンの神を描いた図版を複製したとまで書いている。

ネルヴァルはなぜパンの神を描いた図版を悪魔のために使ったのであろうか？ まず『ギリシア・ローマ神話辞典』の「パーン」の項目を見てみよう。

アルカディアの牧人と家畜の神。(中略）彼は牧人の神として，上半身は毛深い人間で，有髯，額に両角を備え，下半身は山羊で，足は蹄のある姿と想像されている。[21]

キルヒャーの図版と上記の辞典の記述を比較してわかることは，図版で描かれているパンの神は神話で伝えられている事柄にかなり忠実だということである。具体的には額の二つの角，蹄，非常に長い杖を持っている。また山や谷を背景に描かれている。また背中に羽があり，小さな台のような物の上にたっている。肩から腰にかけて星が描かれた細い布が掛っている。厳めしい顔をしているのはこの神の特徴をよく表現している。その図像を見てネルヴァルは悪魔の図像に使うことにした。ネルヴァルが描く悪魔は本質的には善良なる者であった。だからパンの神の図像を複製して，悪魔の図像に使っても問題ではなかったようだ。

さて次に『赤い悪魔』の挿絵を見てみよう。上記のリッシェの著作の小さな絵を見ていた時は気付かなかったが，フランス国立図書館から取り寄せた大判の複写を見て気づくことがあった。この絵を描いたパストロ　Pastelot については残念ながら全くわからないが，パストロはキルヒャーの挿絵を部分的には忠実に真似して描いている。しかしキルヒャーの著作に掲載された図版とは違う部分もある。忠実に描いた箇所と独自の解釈で描いた部分を描き分けている。まず真似をした部分は，額の角，大きな羽，杖，蹄，手の周りにある幾重もの同心円，手の上にある球体，そして７本の光と台である。『エジプトのオイディプス』の図版との違いは，悪魔は黒く描かれている。下半身をなぜか縮めている。蹄の下は球体の上半分である。そして全体的に毛深いように思える。

このようにネルヴァルはキルヒャーの『エジプトのオイディプス』に描かれたパンの神を『赤い悪魔』の悪魔ルシファーを描くために使った。その際これは推論ではあるが，ネルヴァルが挿絵画家パストロにかなり強く指示したおかげで，真似した部分と独自解釈の部分からなる独創的な挿絵が出来上がったと考えられる。よってこの挿絵は牧神ではなく，悪魔を表すことになる。なおこの挿絵にはＡＰと大きく書かれている。

ネルヴァルが『赤い悪魔』の中で図版はキルヒャーの『エジプトのオイディプス』を複製したと明記しなかったら，この二つの図版の相似性を断定することはできなかったかもしれない。それぐらいかなり異なる図版に仕上がっている。

Ｖ.『エジプトのオイディプス』に描かれた女神イシス

ここでネルヴァルがキルヒャーの『エジプトのオイディプス』から得た影響のうち，『エノク書』とは直接関係がない部分も考察してみよう。ネルヴァル研究者の多くが『エジプトのオイディプス』に掲載された女神イシスの図版の影響を指摘している。これは『エジプトのオイディプス』１巻の189ページ（1652年）に掲載されている。これもまたゴドウィンの著書に挿絵の説明が書かれている。キルヒャーはアプレイウスの『黄金のろば』に想を得てこの図版を掲載したと記載している。先に述べたパンの神の挿絵とイシスの女神の挿絵を比較すると，興味深い事実が判明した。それはパンの神が肩から腰にかけてまとっている細い布の星の図柄とイシスの女神の衣装に描かれた星がよく似ていることである。

ネルヴァルは上記の『1850年用カバラ年鑑』に収録された「革命的神秘主義について」*Du*

mysticisme révolutionnaire という記事にイシスの女神の挿絵を掲載している。[22] この文章は後に手を加えられて『幻視者 あるいは社会主義の先駆者たち』 *Les Illuminés ou Les précurseurs du Socialisme*（1852年）に収録された。次のように書かれている。

> Vers cette époque, Cagliostro fonda la *célèbre loge égyptienne*, laissant à sa femme le soin d'en établir une autre en faveur de son sexe, laquelle fut mise sous l'invocation d'Isis. (Voir la figure.)[23]

> この頃にカリオストロは有名なエジプト風のロッジを設立し，彼の妻には女性のためのロッジを作る世話をまかせた。これはイシスの祈りに捧げられた。(絵を見ること。)

この絵には次のような言葉が添えられている。

> Je suis la nature, la maîtresse des éléments, la source première des sectes, la plus grande des divinités, la reine des mânes. (APULÉE.)[24]

> 私は自然，基本要素の支配者，宗派の最初の源，神性の最も偉大なもの，死者の霊の女王。(アプレイウス)

この言葉はアプレイウスの『黄金のろば』第11章の一節である。[25] このイシスの挿絵図版と『エジプトのオイディプス』のイシスの図版を比較すると非常に興味深い。まず頭の上の被り物の形が全く違う。衣装も全く異なっている。共通点はアプレイウスの作品から想を得ていることを明記していること，デザインは違うが頭にかぶり物をしていること，そして右手と左手に物を持っていることである。『エジプトのオイディプス』のイシスは右手にシストラム（古代エジプトの打楽器)，左手に小さな桶を持っていると注釈に書いてある。それに対してネルヴァルの「革命的神秘主義」のイシスは右手に楽器，左手は明確ではないが桶のようなものを持っている。なおこの楽器の絵のほうがシストラムをより正確に描いていると考えられる。

「革命的神秘主義」のイシスの挿絵を誰が書いたのかはわからない。たとえ誰であろうともこの挿絵画家は作品の作者であるネルヴァルの意向をまず尊重したはずである。次にアプレイウスの『黄金のろば』第11章を読み，かつ『エジプトのオイディプス』のイシス女神を参考にして描いたと思われる。ある部分では『エジプトのオイディプス』のイシスのほうが『黄金のろば』の記述に忠実であり，また別の部分では「革命的神秘主義」の挿絵のほうがより忠実な部分がある。ネルヴァルはイシスの女神に関してはキルヒャーの『エジプトのオイディプス』の図版だけから影響を受けたのではないと考えられる。過去に研究者たちがその影響を指摘したことを否定するものではないが，他の作品，他の図版の影響も受けていなければこのように大きな違いは出てこないはずである。

Ⅵ. 結びに代えて

以上のように本論文ではまずネルヴァルが聖書偽典『エノク書』を言及した二ヵ所の記述を分析した。まず最初の箇所は19世紀前半に流行したディオラマについての論文においてである。まずネルヴァルが言及したキルヒャーの『エジプトのオイディプス』の電子テキストを入手した。次にそこに記載された『エノク書』のギリシヤ語文とラテン語訳を検証した。現時点で結論付けることはできないが，キルヒャーが掲載した『エノク書』第６章から第10章は1970年にオランダのライデンで発行されたブラック版に収録されたギリシャ語文に最も近いと考えられる。筆者はギリシャ語やラテン語に習熟しているわけではないので，人名や数字を手掛かりとして比較検討した。現時点では入手できなかった文献もあるので，なぜこのようによく似ているのかの謎は解けてはいない。

ここではっきりと言えることはネルヴァルがキルヒャーの『エジプトのオイディプス』の『エノク書』に関する記述とその図版を通して『エノク書』を学んだことである。それはネルヴァルが生きていた時代には普通に知られていた事実とは異なる記述をしていることから推論できる。ネルヴァルがどの程度ラテン語の書物を読むことができたのかはわからないが，『エジプトのオイディプス』の『エノク書』の翻訳とパンの神の図版を重点的に眺めて『エノク書』を考察したのではないかと考えられる。

次に『赤い悪魔』の検証を行った。フランス国立図書館から複写を入手し，そこに掲載されたルシファーの図版と『エジプトのオイディプス』のパンの神の図版を比較検討した。その結果わかったことは二つの図版には共通点と異なる点があることであった。またネルヴァルがパンの神の図版を参考にして，ルシファーの図版を挿絵画家に書かせたこともよく理解できた。しかしネルヴァルの論法が正しいかどうかは別の問題である。

次に『エジプトのオイディプス』のイシス像とネルヴァルの「革命的神秘主義」のイシス像を比較した。この二つの図版は同じイシス像を表しているとは思えないほどの違いがある。ネルヴァルは挿絵画家に『エジプトのオイディプス』に掲載されたイシス像だけでなく，他の図版の参照も指示したのではないかと想像できる。そうでないと二つの図版の違いは説明がつかない。

今までは原典を入手することが困難なために，校訂版の編者や研究者の記述に頼らざるを得なかったことが多かった。キルヒャーの『エジプトのオイディプス』の電子テキストやネルヴァルの『赤い悪魔』の原書の複写を容易に見ることができるようになり，新たな視点からネルヴァルを研究する可能性が出てきたと考えている。

『エノク書』は英語圏，ドイツ語圏，フランス語圏で著作が刊行されてきた。現物を購入したり，複写依頼によって入手できる書物もあるが，入手困難な重要文献もある。また日本では1970年代には聖書外典，聖書偽典の研究が盛んであったが，その後の研究は停滞していると言わざるを得ない。今後も『エノク書』の原典入手を続行し，まだ解けていない謎を解明する所存である。

注

⑴　*Grand Dictionnaire encyclopédique Larousse*, tome ５, Paris, Larousse, 1983, p.5221（全巻通し番号）。なお21世紀になって発行されたラルース社の百科事典における Hénoch の記述は驚くほど短い（*Le Grand Larousse encyclopédique, volume* １/A-Kingsley, Paris, Larousse, 2007, p.1178.）。

⑵　*Grand Dictionnaire universel du XIX*^{e} *siécle*, tome ９, Nîmes, C.Lacour, 1990, pp.598–599（Réimpression de l'édition de 1866–1876）.

⑶　Gérard de Nerval, *Œuvres complètes, tome* I, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Christine Bomboir, Jacques Bony, Michel Brix, Jean Céard, Lieven d'Hulst, Jean-Luc Steinmetz et Jean Ziegler et avec le concours de Pierre Enckell et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1989, p.841. 以下ネルヴァルのこの巻を PL.Ⅰと略す。ネルヴァルのこの記事を訳す際に『ネルヴァル全集　Ⅲ』筑摩書房，1976年に収録された稲生永訳・註「ディオラマ」と『ネルヴァル全集　Ⅳ　幻視と綺想』筑摩書房，1999年に収録された阪口勝弘訳「ディオラマ，オデオン座」を参考にした。

⑷　*Grand Dictionnaire universel du XIX*^{e} *siècle*, Nîmes, C.Lacour, 1991, p.1216（Réimpression de l'édition de 1866–1876）. キルヒャーに関しては今でも最も役に立つ概説書は Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher, A Renaissance Man and the Quest for Lost Knowledge,* London, Thames and Hudson, 1979（ジョスリン・ゴドウィン著，川島昭夫訳，澁澤龍彦・中野美代子・荒俣宏 解説『キルヒャーの世界図鑑』工作舎，1986年）である。その他に Brian L. Merrill, *Athanasius Kircher*（*1602–1680*）*, Jesuit Scholar,* Mansfield Centre, CT, Martino Publishing, 2003 と Paula Findlen, *Athanasius Kircher, The Last Man Who Knew Everything*, New York and London, Routledge, 2004 を参考にした。

⑸　PL.Ⅰ, p.1818.

⑹　Gallica のアドレスは　http://gallica.bnf.fr
　Gallica ２ のアドレスは　http://gallica２.bnf.fr

⑺　レオンハルト・ロスト著，新井献・土岐健治訳『旧約外典偽典概説 ── 付 クムラン写本概説 ──』教文館，昭和47年。『聖書外典偽典第三巻　旧約偽典 Ⅰ』教文館，1975年に収録された森安達也訳『スラブ語エノク書』と『聖書外典偽典第四巻　旧約偽典 Ⅱ』教文館，1975年に収録された村岡崇光訳『エチオピアエノク書』を参考にした。関根正雄編『旧約聖書外典（下）』講談社，講談社文芸文庫，1999年に収録された新見宏訳『エノク書』も参考にした。この『エノク書』は『エチオピアエノク書』のことである。

⑻　アタナシウス・キルヒャーの『エジプトのオイディプス』と比較検討した多数の『エノク書』の中で主要文献は以下のとおりである。

⒜　英語の文献

The Book of Enoch or 1 Enoch, translated from the editor's ethiopic text by R.H.Charles, Pomeroy, Health Research, 1964.（1912年にイギリスで出版された本の復刻版である。巻末のギリシャ語断片が役に立つ。）

The Apocrypha and Pseudepigrapha of the Old Testament, volume two : *Pseudepigrapha,*
Edited in conjunction with many scholars by R.H. Charles, Berkeley, The Apocryphile Press, 2004.（1913年にイギリスで発行された本の復刻版である。村岡崇光氏（『エチオピアエノク書』（前掲書）の翻訳者）はチャールズ版に対して批判的である。しかし現在でも書籍として流通しているのはチャールズ版である。

(b) フランス語の文献

Le Livre d'Hénoch, traduit sur le texte éthiopien par François Martin, Milano, Archè, 2000.（パリで1895年に発行された本の復刻版である。）

(9) *Apocalypsis Henochi graece*, edidit M.Black, Leiden, E.J.Brill, 1970, pp.21–26. この著作において説明文は英語，『エノク書』はギリシャ語で記載されている。なお富田章夫氏がブラック版の一部を日本語に翻訳し，ネット上で公開している。

(10) 村岡崇光訳『エチオピアエノク書』（前掲書），p.162–163.

(11) PL. Ⅰ, pp.1267–1268 及び *Le Diable rouge, Almanach cabalistique*, Paris, Aubert et Cie, 1850, p. 8. なおパリの国立図書館から取り寄せた複写には1849というスタンプが押されている。実際には1849年に出版されたことを意味すると考えられる。ネルヴァルのこの記事を訳す際に『ネルヴァル全集 Ⅲ』，1976年（前掲書）に収録された入沢康夫訳・註『赤い悪魔』と『ネルヴァル全集 Ⅱ 歴史への旅』筑摩書房，1997年に収録された田村毅・畑浩一郎訳『赤い悪魔』を参考にした。

(12) PL. Ⅰ, p.1268 及び *Le Diable rouge, Almanach cabalistique*, P.8.

(13) 『ネルヴァル全集 Ⅱ 歴史への旅』P.635.

(14) *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*, tome 9, p.599.

(15) Pierre Jovanovic, Anne-Marie Bruyant, *Enoch, Dialogues avec Dieu et les Anges*, Paris, Le jardin des Livres, 2002, p.10.

(16) PL. Ⅰ, p.1268 及び *Le Diable rouge, Almanach cabalistique*, P. 8.

(17) PL. Ⅰ, p.1268 及び *Le Diable rouge, Almanach cabalistique*, P. 8.

(18) Jean Richer, *Gérard de Nerval*, Paris, Seghers, coll.《Poètes d'aujourd'hui》, 1972, pp.98–.99. この本の翻訳であるジャン・リシェ著，篠田知和基訳『ジェラール・ド・ネルヴァル』（セリ・ポエティク12），思潮社，1972年, pp.152–153 にも図版が掲載されている。原書は第7版を参照した。翻訳書は第６版を日本語訳したものである。

(19) Joscelyn Godwin, *Athanasius Kircher, A Renaissance Man and the Quest for Lost Knowledge*, p.59 . ジョスリン・ゴドウイン著『キルヒャーの世界図鑑』（前掲書）p.161 を参考にした。

(20) PL Ⅰ, p.1269 及び *Le Diable rouge, Almanach cabalistique,* P. 9.

(21) 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店，1960年，p.198. 呉茂一『ギリシア神話 上巻』新潮社，新潮文庫，昭和54年，pp.317–320 と *Dictionnaire des mythologies et des religions des sociétés traditionnelles et du monde antique*, sous la direction de Yves Bonnefoy, Paris, Flammarion, 1981, pp.842–849（イヴ・ボンヌフォワ編，金光仁三郎訳者代表『世界神話大事典』大修館書店，2001年，pp.430–437 ）を参考にした。

(22) *Le Diable rouge, Almanach cabalistique*, p.39.

(23) *Le Diable rouge, Almanach cabalistique*, p.38. なおプレイヤッド版（Gérard de Nerval, *Œuvres complètes,* tomeⅡ, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois avec, pour ce volume, la collaboration de Jacques Bony, Max Milner et Jean Ziegler et avec le concours de Michel Brix et d'Antonia Fonyi, Paris, Gallimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1984, p p.1125–1126）と比較すると多少文章に違いがある。なおプレイヤッドにはイシスの図版はない。この文章を訳す際にネルヴァル著，入沢康夫訳『幻視者 あるいは社会主義の先駆者たち（上)』現代思潮社，1968年及び『ネルヴァル全集 Ⅳ 幻視と綺想』（前掲書）に収録された入沢康夫訳『幻視者 あるいは社会主義の先駆者たち』を参考にした。

(24) *Le Diable rouge, Almanach cabalistique*, p.39.

(25) *Romans grecs et latins*, textes présentés, traduits et annotés par Pierre Grimal, Paris, Galllimard, coll.《Bibliothèque de la Pléiade》, 1958, p.357. ネルヴァルの「革命的神秘主義」の図版に添えられたフランス語訳とは異なるが，参考にした。なお日本語訳はアプレイウス作，呉茂一・国原吉之助訳『黄金のろば』下巻，岩波書店，岩波文庫，昭和32年，145～146ページを参考にした。

注記：本論文は平成20年度筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部特別研究助成費によって遂行された研究成果の一部を公表したものです。

(ませ　れいこ：英語メディア学科　教授)